

## 【論 説】

## 日本雑貨貿易商社の転居と入居ビル\*

宇佐美 英 機

## はじめに

日本を代表する総合商社である伊藤忠商事株式会社（以後、伊藤忠と略記する）と丸紅株式会社（以後、丸紅と略記する）はともに、近江国犬上郡八目村（現滋賀県犬上郡豊郷町八目）出身の初代伊藤忠兵衛（天保13（1842）年～明治36（1903）年）を創業者とし、安政5（1858）年を創業年次としている。これまでの研究史において、初代忠兵衛の事績については、『丸紅商店之沿革』（株式会社丸紅商店本社、1931年）、『伊藤忠商事100年』（伊藤忠、1969年）、『丸紅 前史』（丸紅、1977年）、『丸紅通史』（丸紅、2008年）が略述しており、研究上の典拠文献とされてきた。

また、伊藤忠・丸紅の社史および研究史では、忠兵衛が最初に対米貿易を始めたのは、明治18年設立の「伊藤外海組」であり、本店は神戸、支店はサンフランシスコにあったが、営業は同28年まで続いたとされてきた。しかし、筆者はこれらの指摘は必ずしも正鵠を射ておらず、「伊藤外海組」は改称された会社名であること、その前史として「日本雑貨貿易商社」「日本雑貨貿易商會」が存在したことを明らかにした<sup>1)</sup>。また、それらの経営の実態についても

\* 本稿は、平成24年度科学研究費助成事業（基盤研究（B）・「伊藤忠兵衛家同族による事業経営の研究—総合商社伊藤忠商事・丸紅成立前史の分析—」・課題番号24330119）による研究成果の一部である。

1) 宇佐美英機（2006）「初代伊藤忠兵衛と『伊藤外海組』小史」『研究紀要』（滋賀大学経済学部附属史料館）39号。

分析を加えている<sup>2)</sup>。これらの解明を受けて、現在では『丸紅通史』や伊藤忠社内報 *ITOCHU MONTHLY* (2009年3月号) で、修正が行われている。

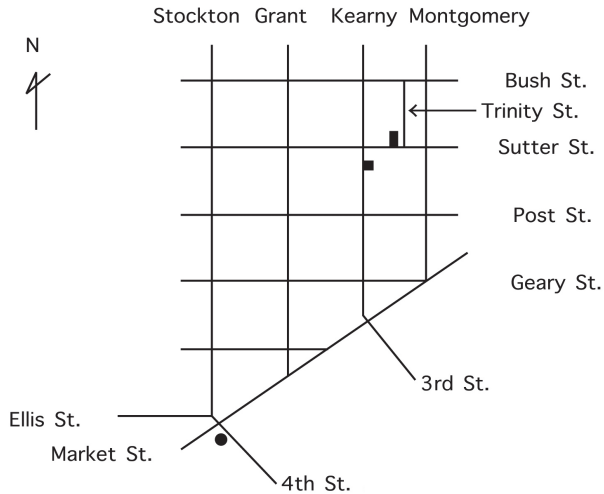
本稿は、上記の会社の支店がサンフランシスコにおいて入居していたビルの位置、およびビルの写真やビル平面図を紹介しようとするものであるが、論述に先立ちサンフランシスコ支店の所在地の変遷について述べておくことにする。すでにこの点に関しては注1)の論文で子細に述べ、現在の状況についても簡単な紹介をしているが<sup>3)</sup>、行論の都合上、ここでも略述する。

「日本雑貨貿易商社」は、明治22年に京都の井上忠次郎たちが合資で始めた「日本雑貨商社」という会社を、初代伊藤忠兵衛と彼の甥である外海鏡次郎が同24年8月に買収したことに始まる。「日本雑貨商社」は、創業とともに同22年9月にサンフランシスコで支店を開設していたが、株主たちの間で紛議が生じ、会社解散の危機に及んで忠兵衛たちが同社を買収し、同24年9月に「日本雑貨貿易商社」と改称したのである。この時、サンフランシスコ支店の商号・営業権・資産などを継承したが、支店はカーニー通り126番(126 Kearny St.)にあり、商号はJapan Curio Trading Co.であった。しかし、会社買収の後、同24年12月21日に第4通り34番(34 4th St.)に転居し、さらに同27年11月にサター通り116番(116 Sutter St.)へと転居した。これらの支店が所在した位置は、第1図の通りである。

この会社は、同25年7月に日本語での名称は「日本雑貨貿易商会」と改められ、同26年6月には「伊藤外海組」と改称され、同28年末に社員の一員であった鶴谷忠五郎に譲渡されるまで、4年余り営業されたに過ぎなかった。この限りでは、当該期にすでに日米貿易で実績を挙げていた三井物産や森村組に及ぶべくもない営業活動の会社であったが、こと伊藤忠兵衛家事業経営の全容と歴史を解明していく上では、意味あるものと考えている。また、これまでの日米貿易史の中では利用されてこなかった資料を紹介するという点でも、

2) 宇佐美英機(2009)「初代伊藤忠兵衛の対米貿易事業」安藤精一・高嶋雅明・天野雅敏編『近世近代の歴史と社会』清文堂出版、所収。

3) 宇佐美英機(2011)「『日本雑貨貿易商会』支店探訪記」『研究紀要』44号。



第1図 サンフランシスコ街路略図

今後の当該分野の研究に資するものと考えている。

## 1 カーニー通り支店

この支店は、もともと「日本雑貨商社」の支店であったこともあって、会社を買収してすぐに第4通り支店へと転居するまでの短い期間利用されたに過ぎない。しかし、共同経営者であった外海が日本雑貨商社時代に監査役として勤務もし、忠兵衛にとっても最初の対米貿易の拠点であったことは間違いない。この支店が入居していたと思われるビルの写真は、写真1である。

この写真はサンフランシスコ公立図書館（San Francisco Public Library）が所蔵する古写真（Historical Photographs）の一葉である（Photo ID #AAB-4255）<sup>4)</sup>。写真のタイトルは120 Kearny Streetであり、1880年に撮影されたとされている。

4) サンフランシスコ公立図書館が所蔵する古写真は、同館のHP（<http://sfpl.org/>）にアクセスしてeLibrary→SF Historical Photosへと入り、キーワードを入力すれば閲覧できる。ただし、利用するにあたっては使用許可が必要である。本稿で利用したものは、許可を得ている。



写真1 カーニー通り支店入居ビル

る。周知のように、1906年にサンフランシスコは大震災により多くの建物が崩壊した。この写真のビル跡地には、後にサターホテルが建設され、現在のGALLERIA PARK HOTELに至ると判断できるが、1906年以前に建て替えられていないと思われるため、1880年撮影のこの写真に写っているビルが、1891（明治24）年当時に支店が入居していたものと考えて良いだろう。

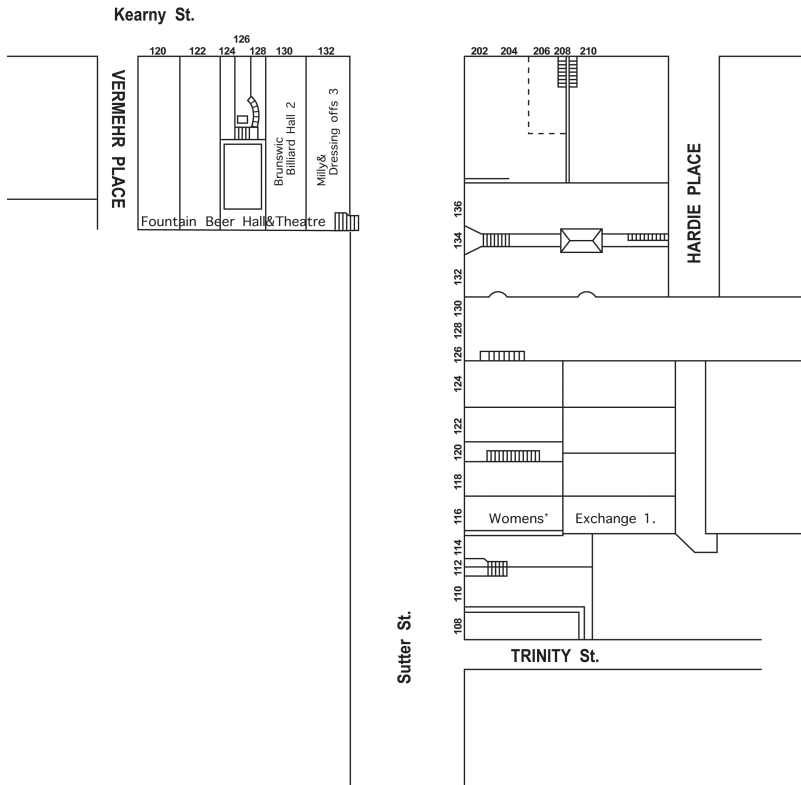
それでは、このビルのどこに位置しているのだろうか。次の第2図は、歴史センターが所蔵する *Sanborn Maps* のマイクロフィルム<sup>5)</sup> から作製したものである。

この図の番号は建物番号であり、便宜上、サター支店の位置も記している。

5) SANBORN FIRE INSURANCE MAPS-SAN FRANCISCO REEL#1 1899-1900.

略称 *Sanborn Maps* は、現在、図書館内の歴史センターで原物を閲覧できるのは、1913年発行のものに建物の新改築図が貼り重ねられたもので、1986年の現況である。このマイクロ撮影されている *Sanborn Maps* は、原本が失われているとのことであり、何年度版のものか確認できない。しかし、*Digital Sanborn Maps* として図書館でオンライン公開されている1899年版の *Sanborn Maps* と比較すると細部に違いはあるが、ほぼ同時期のものと判断できる。なお、*Digital Sanborn Maps* は eLibrary → Articles & Databases へアクセスして閲覧できるが、図書館カードの Barcord と PIN の番号入力が必要なので、これを入手しないと利用できない。





第2図 カーニー通り支店，サター通り支店略図

この図と写真1を照合すると、写真1の右の路地が VERMER PLACE であり、左側にサター通りがあると見て良い。なぜなら、この写真の余白の書き込みには PRESENT SITE OF SUTTER HOTEL とあり、カーニー通りに面しながら現在のサターホテルの位置だとする以上、このビルはカーニー通りとサター通りが交差する場所にあったと考えられる。1913年版 *Sanborn Maps* には同じ位置に、サター通りに入り口がある HOTEL SUTTER を確認できるからである。

さて、VERMEHR PLACE と Sutter St. の間は THURLOW BLOCK と称され、120～132番の四階建てのビルがあった。それゆえ、126番の建物はビルの中央部に位置することから判断して、道路側に日覆いが突き出た所の1階、もしくは2階に支店があったものと思われる。マイクロフィルムの画質が悪いため、図書館据え付けのマイクロリーダーでも判読が困難であり、プリントアウトするとより一層文字が潰れてしまう。しかし読み取れる限りでは、2階には歯医者や事務所（OFFICES）があったとされている。また、写真スタジオや洋服仕立業なども入居していたことがわかる。ただ、明らかに1階には2階へ続く階段らしきものが描かれていることから、通路のような所であったと思われるため、支店は2階にあったのではないかと判断している。もっとも、4階にも事務所があるとしているので、この可能性も否定はできない。

*Digital Sanborn Maps 1899-1900* (Vol.1-1899, sheet 25) によれば、1階には後掲第3図のように126番以外には「S.」の記号がある。これはStoreの略号であることから、いずれも様々な商店が入居していたことがわかる。しかし、126番の位置にはその略号は記されていないのである。もっとも、第2図の階段らしき所の横にある□の中にも文字が記されているが、判読できない。それゆえ、ここに何があったのかを読み取ることができない。いずれにしても、この1階で商品を陳列したとすれば、極めて狭隘な空間のみを借用したということになり、その可能性は低いのではないだろうか。

ともあれ、このビルには様々な業種の商店・オフィスがあり、ビアホール、劇場、遊興場なども入居しているなど、雑然とした所であったと思われる。輸入雑貨を販売する店としては、必ずしも適していなかったように思われるが、その分、家賃は安かったものと推測できる。なお、1904年版の *San Francisco Blue Book* には、当時126番に入居していた時計・宝飾店の内部写真が掲載されているが<sup>6)</sup>、何階の部屋であったのかまでは判明しない。少なくとも時計・宝飾品を販売する店である以上、防犯上からも、通路に用いられる

6) p.697. <http://www.archive.org/details/sanfranciscocity1850kimb> で閲覧できる。

1階の狭隘な空間であったとは考えがたいだろう。

## 2 第4通り支店

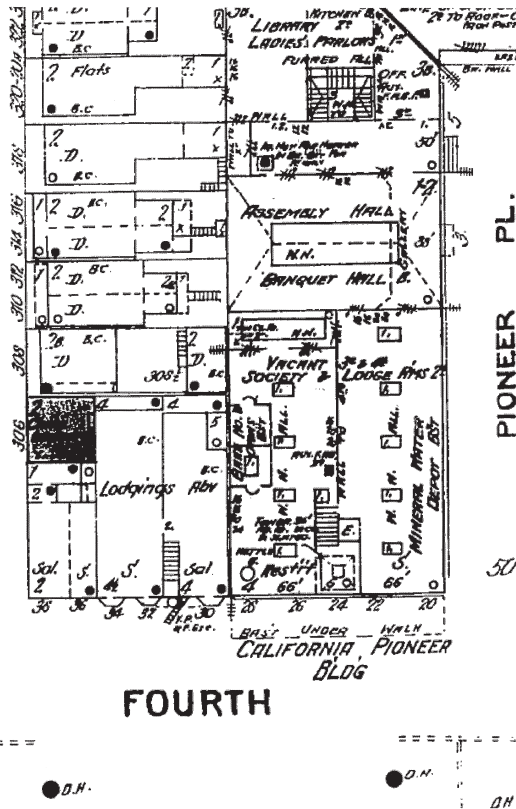
明治24(1891)年12月、日本雑貨貿易商社は新たに第4通り34番へ転居した。この場所へ転居した理由は不明であるが、仮に2階や4階のOfficeであれば一階のStoreに比すれば小売商として条件が悪かったからであろう。一方、建物が所在した位置は明確であるが、入居していたビルの写真は管見の範囲では残されていないようである。しかし、建物の平面図を知ることはできる。その場所を拡大プリントアウトしたものが次の第3図である<sup>7)</sup>。

この図は1889年当時のものであるため、支店が入居する2年前の状態である。印刷が不鮮明であるが、34番の建物は下辺のFOURTHと通り名が書かれた所のFの上部位置にあたるSのマークが入っている所である。潰れて判別しがたい文字は、30番と同じ「4」であろう。この数字はビルが4階建てであることを示している。1階は店舗で上階は住居であったと思われる。ここは隣に同じく4階建てのカリフォルニア・パイオニアビルが建っており、その続きのビルに所在していたことがわかる。大震災以前のパイオニアビルの写真は、サンフランシスコ公立図書館のウェブサイトで見ることができる<sup>8)</sup>、写真の左側にわずかに建物を確認できる。その写真から判別できる限りでは、同じ4階建てであるものの、パイオニアビルの方が高かったようである。

この支店の床面積がどれくらいなのかは算出がたいが、建物平面図を比較する限りでは、カーニー支店よりは広かったものと思われる。また、マーケット通りと第4通りの交差点角——第3図ではPIONEER PL.の右側——に建っていたFLOOD BUILDINGは、*Digital Sanborn Maps*の1887年版によれば建築中(NOT COMPLETED)であったことがわかる。それゆえ、支店が転居した頃には完成しており、新しいビルとパイオニアビルへの人の流れがあったも

7) *Digital Sanborn Maps 1899-1900*, Vol.2-1887, sheet 136.

8) <http://sflib1.org:82/record=b1020025~S0> Photo Id #AAC-5156. なお、1906年の大震災によって崩落したパイオニアビルと支店入居ビルの写真は、Photo Id #AAC-4240で確認できる。



第3図 第4通り支店所在ビル平面図

のと思われ、店舗としては条件が良かったのではなかろうか。また、第4通りはサンフランシスコ湾の埠頭へと続く道でもあり、輸入した商品を搬入するにも利便であったとも思われる。

### 3 サター通り支店

サター通りにあった支店へは、明治27(1894)年11月に移転してきた。こ



写真2 サター通り支店入居ビル

の支店は、かつてのカーニー通り支店から近い位置にあった。この支店が入居していたと思われるビルの写真は、写真2である。

この写真もまた、1880年に撮影されたものであることが判然としている。写真の書き込みはいささかわかりづらいが、N. S. SUTTER BET MONTGY-KEARNY ST 1880と記されている。写真タイトルは Sutter between Montgomery and Kearny streets とされている。問題は写真のどちら側がカーニー通りなのか、ということであろう。この点を検証するには、写真中央のビルの3階に California Electrical Works と記した看板があることが手がかりとなる。この会社は、*Langlay's Sanfrancisco directory for the year commencing*<sup>9)</sup> 1880年版によると、サター通り134番にあったことが判明する。したがって、この写真は *Sanborn Maps* と照合するならば、偶数の番号の家並みを写していることがわかる。それゆえ、これはカーニー通り側からサター通りの北

9) p.979 <http://archive.org/details/langleyssanfranc1880sanf>にて閲覧。2012年8月20日。

側を撮影したものと見える。また、1880年撮影の古写真のなかにタイトルが Sutter Street at Montgomery (Photo Id#AAB-7313) とされた、モンゴメリー通りからサター通りの北側を撮影したものがあるが、ここに写っているビルと一致していると判断できるのである。

したがって、支店が入居していた建物は、写真の4階建ビルであり、116番は右端（東側）の日覆いが出ている所であったと確定できる。この4階建ビルは、1899年の *Digital Sanborn Maps* によれば JOHNSON BUILDING であり、116～124番の建物番号が与えられ、116番には「S」の記号があり Store であったこともわかる。マイクロフィルムから作図した第2図ではこの場所に Womens' Exchange が入居しているとあるが、占有していた時期は不詳である。また、2～4階には OPEN CORRIDOR や MOSE W RMS & OFFS などの書き込みがある。全体としてこの建物は、オフィスビルであったことがわかる。

別稿でも述べたが<sup>10)</sup>、この支店はそれまでの支店に比べて「地位モ上等」な所への移転であった。家賃は月に300ドルであり、「店モ大ナリ、則チ小売卸売兼業ノ目的ニ出タルナリ、日本ヨリ朱塗欄干ヲ送り、二階ヲ裝飾セリ、蓋シ太平洋西岸ニ於テ最美ノ日本雜貨店ヲ現出シタルモノナリ」<sup>11)</sup>と記すように、転居するとともに朱塗りの欄干を日本から運び込んで意匠を凝らした店舗に改修している。その設えは、カリフォルニア州一帯において、最も美しい日本雜貨店であると自画自賛している。朱塗りの欄干がどこに設置されたのかまでは判明しないが、少なくとも異国情緒が漂うものとして市民の耳目を集める効果はあったであろう。この点からも、サター通り支店への転居は、改めて意欲的に輸入雜貨の小売・卸売業を営もうとしたことを示している。

この間、明治26年6月には、会社の名称を伊藤外海組と改め、10月には本店を神戸、支店をサンフランシスコと横浜に置き、日本雜貨を外国に輸出する目的で、10年間存続の共算商業組合伊藤外海組の契約書を日本で作成し

10) 前掲拙稿「初代伊藤忠兵衛と『伊藤外海組』小史」。

11) 「記録帳」滋賀大学経済学部附属史料館保管伊藤忠兵衛家文書。

た。さらには、同 28 年 10 月 7 日に合名会社組織に改めてもいる。

ところが、子細は判明しないが、同 28 年末には同社は解散されたようである。解散の原因は、事業を中心的に担っている外海が病気になり継続するのが困難であったからだとされているが、疑問がないわけではない。むしろ主要には、忠兵衛や外海の対外貿易の関心が清国からの棉花・綿糸輸入販売へと移っていったことが推測される。とはいえ、なぜサンフランシスコ支店を急遽閉店することにしたのかについて明瞭に記した史料は、まだ発掘するに至っていないのである。

#### 4 サンフランシスコでの名称

伊藤忠兵衛たちがサンフランシスコで営業を開始した時点で、日本雑貨商社の商号もそのまま買収したため、当地では会社名を Japan Curio Trading Co. と称したはずであるが、それらがサンフランシスコにおいてどのように変化しているのかについても検討しておきたい。それは、後に改称された「伊藤外海組」をどう読むのか、ということにも関わっているからである。

さて、サンフランシスコでの商号を確認する上では、*Langley's San Francisco directory for the year commencing* の各年次版が利便である。現在はサンフランシスコ公立図書館の HP から eLibrary → eBooks → Historical Works へアクセスして、その画面で san francisco city directory と入力し Search をかければ、多くの年次別の年鑑をオンラインでも閲覧できるし、PDF でダウンロードすることも可能である。同書には当時のサンフランシスコで営業していた会社名と所在地などが掲載されているのである。

1891（明治 24）年版の 747 頁には、

Japan Curio Trading Co., T. Uyematsu manager, importers Japanese goods, 126 Kearny

と載せられている。マネージャーの T. Uyematsu と名乗る人物は、日本雑貨商社時代の従業員であったと思われる。忠兵衛の甥の外海鏡次郎が監査役と

して渡米したのは前年の5月であったが、その名は掲載されていない。

1892年版になると、商号やマネージャー（誤植があり、T. Uyematsnerとなっている）、取扱品は同じであるが、住居は34, 4thに改められている(p.761)。そして、1893年版では商号は級数が大きくなるとともに、JAPAN CURIO TRADING CO.と大文字になり、続いて、次のように記載されている(p.767)。

T. Satomi and C. Ito proprietors, Japanese Goods, 34 Fourth, near Market

Satomi はあきらかに Sotomi と書かれるべきで誤植であろう。ただ、それまでのマネージャーに替わって所有者として忠兵衛と外海の名前が掲載されるようになったことが注目される。この商号が当地で登記されたのかどうかについては、まだ調査が及んでいない。

次いで1894年版になると商号が改められている。文字の級数も前年と同様に大きいままである。ここでは次のように記されている(p.757)。

ITO SOTOMI & CO. successors to Japan Curio Trading Co., Japanese goods,  
34. 4th

ここで注目されるのは、商号は以前のを継承した会社であることが明示されるとともに、日本での表記である「伊藤外海組」は、「いとう そとみぐみ」と読んだ可能性があることである。これまでは『伊藤忠商事100年』などで、「外海」を「ソトウミ」とフリガナされていたこともあって、「いとう そとうみぐみ」と読み慣らしてきたが、どうやらそれは誤りであった可能性がある。ただ、「いとう」をITOと表記している以上、「SOTOMI」が「SOTOUMI」の省略形である可能性も残ってはいる。このことは今後も検討すべき課題ではあるが、次の1895年版を見てみよう。

1895年版では、住所表記が改められているとともに、電話番号が掲載されていることが注目される(p.796)。

ITO SOTOMI & CO. successors to Japan Curio Trading Co., Japanese goods,  
116 sutter, Telephone Main 1378

サター支店には電話が架設されたという一事をとってみても、経営に本腰



を入れようとしたこと、電話を用いて営業できるほどの英会話力が伴っていたことを推測させる。もっとも、従業員の中には現地で採用したアメリカ人もいたようであるから<sup>12)</sup>、社員全員の高度な英会話能力は必要なかったかも知れない。

次いで1896年版では、ITOとSOTOMIの間に「,」が付されたことと電話番号がMain 5193に替わったことが明記されていることが前年版との違いであるが、その他の修正記述は見られない(p.835)。翌年度版にも、同文が掲載されている(p.909)。

この1896年、1897年版で特に注目すべきことは、伊藤外海組は明治28(1895)年末には鶴谷忠五郎に譲渡されていたにも拘わらず、サンフランシスコでは商号が改められなかったことであろう。鶴谷はITO, SOTOMI & CO.の商号で営業を続けたのである。このことが、「,」の付加と電話番号の変化として表現されたものと思われる。

ところが、1898年版からはITO, SOTOMI & CO.の名称は掲載されなくなるとともに、鶴谷の名前もTu, Tsuの綴りのなかに見出すことができない。このことから推して、1897年内に鶴谷もまたサンフランシスコから撤退したものと推測できる。

## む す び

以上のように、初代伊藤忠兵衛とその甥外海鍔次郎たちがサンフランシスコで日本雑貨の輸入販売に携わった支店が入居していた建物は、当時の資料によってほぼ確定できたといえよう。すでに述べたように、1906年にサンフランシスコは大震災に見舞われ、市内の建物の多くが崩壊したことは、図書

---

12) 前掲「記録帳」の明治26年1月30日の記事には、「明日ヨリ西洋人ヲ老人雇入マス事ニナリマシタ」とある。また、二代忠兵衛が明治42年にアメリカ経由でイギリス留学に行った際、サンフランシスコの到着時に「父が明治二十一年(1888年)に店を持ったサンフランシスコに上陸。米国人である旧番頭と級友に迎えられ」と述べている(『私の履歴書 経済人1』p.363, 日本経済新聞社, 1980年)ことから、アメリカ人が雇用されていたことがわかる。

館に所蔵されている古写真でも知ることができる。それゆえ、本稿で紹介した写真はいずれも1880年に撮影されたものではあるが、この大震災のなかで焼失することなく後世に伝えられたことは幸いであった。

そして、その写真と *Sanborn Maps* や *Langley's San Francisco directory for the year commencing* などを照合することにより伊藤忠兵衛家の対米貿易事業の拠点と営業の実態の一部を復元できたのも、ある意味で奇跡的なことといえよう。

確かに忠兵衛たちが対米貿易に従事した期間は短いものであった。その間には米国の経済恐慌にも直面し、必ずしも順調な経営ではなかったと思われる<sup>13)</sup>。しかし、彼たちは間違いなく米国西海岸地域で貿易事業に携わる日本人として、最も初期に米国へ進出して営業を行ったのである。

すでに冒頭でも述べたように、初代忠兵衛が対米進出したのは「日本雑貨商社」が明治22(1889)年9月にサンフランシスコで開設していた支店を継承してからのことであった。しかし、二代忠兵衛はその年次を明治18年、21年と混乱して記憶していた<sup>14)</sup>。それほどにこの事業は、当時忠兵衛が経営した伊藤本店(呉服)、伊藤京店(呉服・染物)、伊藤西店(羅紗輸入)とは異質であり、本家が統轄する事業というよりは、忠兵衛個人のポケットマネーで運用されたベンチャー事業といえる。当時の伊藤忠兵衛家にあっては、伊藤西店も同様であるが、外国との貿易を行うには経験も人材も未熟であったため、独立した事業部門として永続させるのは困難であったと思われる。その意味では、彼の個性による冒険的・挑戦的な経営者精神の発露であったといえる。

13) サンフランシスコ支店の経営状態については、前掲拙稿「初代伊藤忠兵衛の対米貿易事業」で明らかにしているが、帳簿上では黒字であるものの、それは商品の在庫と多額の売掛金によってに過ぎない。

14) 明治18年だとするのは古川鉄治郎(1937)『在りし日の父』(非売品)や『伊藤忠商事100年』『丸紅 前史』など。同21年だとするのは、『私の履歴書 経済人1』(注12参照)や伊藤忠兵衛・内田勝敏「商社・紡績の二筋に生きる」(『別冊中央公論 経営問題 冬季号』p.255, 1965年)での発言。

なお、『在りし日の父』を含む初代忠兵衛に関する資料は、宇佐美英機(2012)『初代伊藤忠兵衛を追慕する一在りし日の父、丸紅、そして主人一』清文堂出版、に編集・収録しているので参照されたい。

とはいえ、この経験は明治 26（1893）年に開店する伊藤糸店（棉花・綿糸）による日清貿易へ転進するための礎になったと思われる。

本稿で明らかにした史実を敷衍するならば、1890 年代の米国西海岸地域の日本人による事業活動を明らかにしていく上で、いくつかの手がかりを得たのも確かであろう。これまでの米国西海岸地域の研究においては、主に農業移民史の解明が主であったことを踏まえるならば、支店が入居していた建物が所在する地域が、当時のサンフランシスコのなかでどのような経済環境にあったのか、また取引先がどのような位置にあったのか、それらの子細に検討することによって、ニューヨークを中心とした米国東部地域の貿易史に留まらない日米貿易史を描くことができると思われる<sup>15)</sup>。

すでにサンフランシスコ支店の取引先については、注 2) の論文で紹介しているが、それらの取引先を *Langley's San Francisco directory for the year commencing* などの商工名鑑に載せられた人名・会社と照合させることにより、ある程度の解明が可能だと思われるが、今は指摘にとどめ今後の課題としておきたい。

（うさみ ひでき・滋賀大学経済学部）

---

15) 伊藤家が事業を撤退させて以後のことではあるが、高嶋雅明(1993)「戦前期カルフォルニアにおける横浜正金銀行と日系社会—1990～1935—」『大阪大学経済学』第 42 巻 3・4 号、が明らかにしたことに学び、サンフランシスコ支店を開設していた当時の伊藤家などが、当地でどのように資金調達し利益を日本へ送金したのかの検討も必要であろう。

The Doshisha University Economic Review Vol.64 No.4

Abstract

Hideki USAMI, *The Offices That the Japan Curio Trading Co. Moved to San Francisco*

This article reports on three offices of the Japan Curio Trading Co., which was renamed ITO SOTOMI & Co. in San Francisco and imported Japanese goods. In the process of preparing this article, I discovered in the San Francisco Public Library some historical photographs, building maps, and city directories. Referencing these materials, this article presents and clarifies the historical facts concerning these three offices.